師範ブログ８

庚寅神無月弐拾弐日
無涯塾師範　廣瀬敏男

陣中に戯言なし（道場の規律）

私の好きな言葉のひとつに、「陣中に戯言なし」という戒めがある。
己の命をかけ、戦闘の一瞬に己の全てを賭けた陣中では戯言など毛頭ないのが当然である。
私たち居合を稽古する者にとって道場は、まさに陣中である。
仮令、居合の敵が仮想の敵であろうと全精力を傾注して敵と対峙する訳であるから陣中に等しい。絶対そこには戯言などあってはならない。戯言＝戯事である。

道場は神聖な場所であり稽古が始まれば戦場である。であるから、心を清め恭しくお辞儀をして道場に入るのだ。
話が反れるが、道場には師がいて仲間の剣士がいる。そこで、その人が執る態度を見ればその人の人間性が分かる。そこそこの段位を持ちながら挨拶が出来ない剣士も多い。
他の道場の高段者でも見受けるのだが挨拶さえろくに出来ない人がいる。そんな人は、剣士どころか、「人間の屑」と、私は心の中で断じている。
挨拶という言葉の意味は、「自分の心を開いて相手に迫る」と、いうことである。自らの心を開かなくて仲間といい切磋琢磨が出来る訳がない。
私は、さすが、「無涯塾」に籍を置く者は、居合も立派だが、礼儀や立ち居振る舞いも素晴らしいといわれるようにしたい。このことが我々の差当たりの目標である。
見た目で分かる表面の、上着やズボンが立派なら、他人からは見えないシャツ類が汚れていてはならないのだ。見えない部分は表面の上着以上にもっと清潔でなければならない。
居合演武を表として譬えれば、内なる礼儀や立ち居振る舞いこそ演武より勝っていなければならないと考えている。

道場は命をかけた戦の場所である故、気持ちを引き締め稽古に集中しなければならない。
私は、道場の規律を考える時期に来ていると考える。
稽古が終わり、「師より先に帰る者」が、当たり前のことの様に多くなって来た。
何のため居合道の「道」を究めようとしているのか疑問に思う今日この頃である。こんなことを許してきた自分が一番悪いのだが・・。　了

和気藹々の雰囲気の中にも最低限の秩序と規律を守るのが無涯塾発展の礎である。